

個人懇談会

初めて3年生の担任になり、拓也くんを受け持った。拓也くんは、いつもにこにこしていて、友だちといさかいを起こすようなことはなくて、のんびりした性格の子だった。ただ、シャツはいつも外に出ていて、靴下ははかず素足のまま。繰り返し注意しても一向にあらためる風はなかった。家庭訪問をすると、犬、猫、鶏、亀、魚、へびと何種類もの動物を飼っていた。お母さんの「のびのびと育てたい。」という言葉が少し気にはなったが、その時はそれほど重大には考えていなかった。

拓也くんは宿題をしてくれなかった。休み時間にさせようとしても本気にならない。そして、これはいかん！と思ったのは、九九を覚えていない。覚えていないというのは言いすぎかもしれないが、 7×6 や 8×7 などになると、7の段や8の段を始めから唱えないと出てこない。これでは、かけ算やわり算の計算ができない。

言いだしにくいなあとは思ったけれども、個人懇談でお母さんに九九が使えないことを話して、夏休みに練習してもらうことにした。「拓也くん、九九が使えないんです。始めから言えば言えるんですけども、かけ算やわり算をする時に使えないんです。」と切り出した。お母さんは、ああそんなことですかといった様子で、「その気になれば勉強するようになると思っています。今は、自由にのびのびと生活させたいんです。無理やり勉強させようとは思っていません。」と言われた。九九が使えず、かけ算やわり算もできなくて、『自由にのびのびと』もないだろうと思った。「それでも、九九が使えなど、これから学習する算数は理解できないままになりますよ。」と言うと、「拓也を束縛したくないんです。これがわたしと主人の教育方針です。」と返された。それからはわたしも言葉に感情が混じり、言葉に丁寧さを欠いたやり取りが続き、お母さんは、「九九を使えるようになればいいんですね。夏休みの間にはできるようにします。」と語気を強めて話し、「それじゃあ、失礼します。」と明らかに不機嫌な様子で帰って行かれた。今のわたしであれば、「わたしの言い方がよくなかったかもしれません。」とか、「まあまあ、もう少しお話ししましょう。」などと言うのだけれども、その時は、「そうです。九九を使えるようにしてほしいんです。」と言ってしまった。

九月になり、拓也くんは九九が使えるようになった。元来、理解力はあるものだから、算数の成績はずいぶんよくなった。電話でお礼を言ったか、二学期の個人懇談で話をしたはずだけれども、その記憶はない。

長男が高校生になって、「父ちゃん。拓也くんって教えた？」と聞いてきた。「ああ、教えたよ。」と答えると、「拓也くんすごく優秀なんで。理科系に進むって言ってたよ。」と言う。九九が使えなかった子が理科系かと思うと共に、お母さんとの感情混じりのやり取りを思い出した。拓也くんは、長男と同じ年だから今年36歳になる。元気でやっているかなと思う。わたしの少しチクツとする個人懇談会の思い出！。

暑い中大変ですが、意味ある個人懇談会になってほしいなと思っている。

※拓也くんは仮の名前です。